講　演

テーマ　インフルエンザとその対策（主に、新型インフルエンザ）
講　師　慶應義塾大学医学部　小児科
慶應義塾大学病院　感染対策室　室長補佐
慶應義塾大学病院　新型インフルエンザ対策本部　新庄正宣氏

1．インフルエンザウイルスについて

インフルエンザは、生きた細胞に入って初めて増殖する。1ミクロンより小さく目に見えない粒子である。形は丸型で3種類の棒がついている。一本目はNAと言う棒でタミフルが効く。二本目はシンメレルが効き、残りはワクチンが効く。ウイルスの性質として、湿度が上がると感染性が下がる。しかし高温多湿になるとまた流行する。

インフルエンザは3つの型がある。C型は臨床的に注目されていない。A型は、人をはじめとする色々な動物にうつり新型はA型である。B型は人にだけ移り春に流行する。ワクチンの効果として、70％の発生予防効果とはかかった人のうち70％の人はワクチンを打っておけばかからずにすんだという状態である。予防接種をしているとインフルエンザにかからないのではない。

2．新型インフルエンザの概論

ブタ由来インフルエンザA/H1N1である。2009年春にメキシコにおいて流行しその後メキシコ・米国・カナダを中心に全世界にヒト⇒ヒト感染が拡大していった。日本でも5/9に感染例を水際対策で講じたがその後は感染が拡大していった。世界においても6/16にPHASE6が発表された。日本では、秋の新学期から学校・学級閉鎖が相次ぎ新型ワクチン接種が焦点になっている。感染拡大になり軽症例は報道されず重症例だけになる。厚労省に報告された2775例のうちやはり0歳～9歳までが半数を占めている。また男性が63．6％を占めていて入院患者の一割が亡くなっている。新型インフルエンザ症例として、軽症例が多いが脳症・呼吸障害・心筋炎などが報告され、脳症は急性の意識障害（応答がない）を主徴としている。特徴としては痙攣血圧低下で呼吸が浅くなる。

3．新型インフルエンザこれまで

4月は国内流入阻止を行い国が守ってくれた。検疫・帰国者検査は、他国とはことなるが時間稼ぎができたことが効果的であり、今後の対応の準備ができ、また発熱相談を一挨に行政が引き受けたことで医療に専念できた。一方国民は報道しか情報収集ができないため国の政策転換時には報道が先走り医療現場に報告がなく戸惑うことが多々あった。早めの受診というスローガンも夜中の受診希望が後を絶たない結果を作ってしまった。

4．新型インフルエンザこれから

私の要望として引き続き問い合わせはセンターで、情報はまず医療施設に、新型ワクチン接種は保健所でお願いしてほしい。

流行拡大となった今、自分の健康は自分で守ることが大切である。そのためには、規則正しい生活で基礎代謝を低下させない。マスク・手洗い、手は口鼻に持っていかない。咳は手ではおさえない、おさえたらすぐ手を洗う。マスクの正しい装着等を組み合わせることで予防していくことが大切である。新型ワクチンについては、不活化ワクチンであり重篤な副作用は起こらないと考えられている。新型と季節型は同時に接種できるが4～8週間空ける必要。